声　の　通　路

── 異文化理解とコミュニケーションの風景 ──

松　村　賢　一*

声と表情

まず声の文化と文字の文化が交錯する場面を垣間見て，それを話の糸口としたい。夜な夜な憑かれたように Bram Stoker（1847–1912）の *Dracula*（1897）をダブリンの部屋で読みふけったことがある。

元駐日アイルランド大使の故ショーン・ローナン氏から，氏が理事をつとめる The Bram Stoker Summer School への誘いがあったのは 1997 年 6 月の終わり頃であった。“We need new blood.” と，いつもの冗談まじりの電話で話がはずみ，一緒に出席することになった。この夏期学校は 7 回目を迎えるが，『ドラキュラ』の出版 100 周年，著者ブラム・ストーカーの生誕 150 周年を記念して 6 月 29 日から 7 月 6 日にかけて，ストーカーの生地であるダブリンのクロンターフで開催された。*The Times* にも『ドラキュラ』出版 100 周年が大きく報道され，*The Irish Times*（April 29）は “Fangs for the memories” という見出しで，1 面を割いてブラム・ストーカーと『ドラキュラ』の記念にあてている。

この記念行事をきっかけに *Dracula* を初めて読んだ。文章もさることながら，緊迫感を高めていくプロットの入念な組立は見事であり，ストーリーは手紙や日記，日誌，電報，新聞記事，時刻表などで織りなされ，迫力のあるドラキュラ狩りが展開する。このゴシック小説には速記，タイプライター，蓄音機といった世紀末の文化を道具立てに，コミュニケーションと声の現実性が仕掛けられている。

ジョナサン・ハーカーはトランシルヴァニアのビストリッツの宿で一夜を過ごし，翌日まわりの制止を無視してドラキュラ城へ向かう場面で始まる。ハーカーの速記文字による日記の体裁をとっている。

> When I got on the coach the driver had not taken his seat, and I saw him talking with the landlady. They were evidently talking of me. …some of the people who were sitting on the bench outside the door …came and listened, and then looked at me, most of them pityingly.…
>
> When we started, the crowd round the inn door, which had by this time swelled to a considerable size, all made the sign of the cross and pointed two fingers towards me.
>
> With some difficulty I got a fellow-passenger to tell me what they meant; he would not answer at first, but on learning that I was English he explained that it was a charm or guard against the evil eye. This was not very pleasant for me, just starting for an unknown place to meet an unknown man; but every one seemed so kind-hearted, and so sorrowful, and so sympathetic that I could not but be touched. I shall never forget the last glimpse which I had of the inn-yard and

* 中央大学名誉教授，アイルランド文学・文化，比較文化

its crowd of picturesque figures, all crossing themselves, as they stood round the wide archway, with its background of rich foliage of oleander and orange trees in green tubs clustered in the centre of the yard. Then … we set off on our journey.[1]
（乗合馬車に乗りこんだ時，馭者はまだ席におらず，宿屋のおかみと外でなにか立ち話をしていた。（二人は）どうせ自分のことを話していたのにちがいない。……宿屋の前のベンチにいた……連中も，やってきて，二人の話をそばで聞いていたが，そのうちにだれかれとなく……気の毒な人といわんばかりの顔をしてさかんにこっちをジロジロと見だした。……

ところで，馬車がいよいよ出るという時に，宿屋の前にあつまっていた連中 —— そのときは，もうかなりの黒山になっていた —— が，なにを思ったか，いっせいに自分のほうに向いて十字を切り，二本指をサッと出した。へんなことをするなと思ったから，自分は乗客の一人をつかまえて，あれはなんのマネかといって聞くと，その男は，最初は返事を渋っていたが，こちらがイギリス人だとわかると安心したとみえ，あれは魔除けのまじないだとおしえてくれた。こっちはこれから，見ず知らずの土地へ，見ず知らずの人に会いに行こうというのに，魔除けのまじないとは縁起でもないと思ったが，見渡したところ，車中の客はいずれも人のよさそうな，思いやりの深そうな人たちばかりなので，自分も，なんとなく胸の暖まるものがあった。宿屋の前で最後に見たあの光景 —— 絵にかいたようななりをした人たちが広い拱門の前に並んで，空き地のまんなかに緑の肩をよせて茂っている夾竹桃やオレンジの木を背景に，いっせいに十字を切ったあの光景を，自分はおそらく終世忘れないだろう。……いよいよ道中に踏み出したわけである[2]。）

ここに現れているのは見知らぬ地の住民たちから洩れてくる声，それもさまざまに異なった声であり，St. Stephen's Eve という習俗の闇から聞こえてくる声であり，おののきの動作・表情（paralanguage）である。ハーカーの耳はこれにチャンネルを合わせようとするが，言葉と風土がまったく遊離しているため，その心をとらえることができない。以後ドラキュラ狩りの中で行われる情報交換はすべて文字であるということに注目したい。

現代においてはタイプライターが姿を消して電子機器が社会の隅々まで浸透し，言語を超えた映像による伝達も smart phone によって手軽になされる。そしてコミュニケーションのフィールドにはこれまでになくノイズが充満しているようだ。ここでいうノイズとはピッチやストレス，イントネーション，リズムといった prosodic features（韻律特徴）であり，身振りや手振り，動作，表情といったパラ言語である。さらに，コミュニケーションには話し手と聞き手，語り手と読み手の間に何らかの距離が生じ，「言いよどみ」が不意に起こり，話の内容が別の方向へ展開したりもする。しかし，コミュニケーションはとりわけて複雑な様相を呈してきているわけではなく，言語による伝達能力がこれまでよりダイナミックになってきたと言えるだけかもしれない。

そこで，“communicate” の語源だが，「口頭によって伝達する」あるいは「精神的に交わる」ことを意味する “commune” からきている。さらに，“communicate” は “have a common channel of passage”[3] を元来意味している。英語力はこの声の通路をどのくらい共有できるかによるだろう。

外国語としての英語を学ぶにあたってまず重要なことは発音であり，文の仕組みであり，文化である。いずれもハーカーがドラキュラの城につながるボルゴ街道のビストリッツで村人たちのサインにチャンネルを合わすことができなかった世界を頭に浮かべてみよう。

音の風景

発音（pronunciation）は音（sound）と抑揚（intonation）とリズム（rhythm）の要素から

なる。日本語を母国語とする人にとって英語の発音は厄介である。まず音であるが，喉頭原音が口や喉や鼻で共鳴して声になり，母音や子音，あるいはその結合が口の形や舌の位置によってつくられ，発せられる。面倒なのは日本語と英語では声の通路に違いがあるということだろう。

昨年の 10 月頃だったろうか，大学からの帰り道に車のラジオから NHK のニュースが流れた。アナウンサーの発音がはっきりしないため，何を言っているのか聞き取れなかった。帰宅後，ノーベル物理学賞を伝える NHK 総合テレビの 7 時のニュースの字幕に「ヒッグス粒子」[4] とあり，初めて何のことかわかった。アナウンサーは「ヒックス粒子」と言っているように聞こえた。ラジオから聞こえてきたのは「ヒックスリーシュ」「イックスリーシ」「エックス？」か，推測することはおよそ不可能であった。英語の音と日本語の音の差異がはっきりと出た感じだ。“The Higgs boson” の /hígz/ の 4 つの音素はいずれも日本語にはない音素で声の通路を異にする。

母音をはじめ，“home” の /h/ や “pub” の /p/ と /b/，“fever” の /f/ と /v/ など，/g, l, r, ʃ, ʧ, θ, ð, w/ などと合わせて悶着を起こしやすい子音もあるが，とりあえず語尾の /n/ の音だけは自然と出るようにしておくことが肝腎であろう。ミュージカルの *My Fair Lady* で Professor Higgins が Eliza に二重母音 /ei/ を教える場面があるが，これは同時に “The rai***n*** i***n*** Spai***n*** stays mai***n*** ly i***n*** the plai***n***” のように /n/ の習得にもつながる。舌の先を上の歯茎にあて，舌の両脇を歯の両側に押し当てると /n/ の音が出るが，あえてカタカナにすると「ンヌ」となる。アメリカにおける歌手のヴォイス・トレーニングではとりわけ語尾の /n/ に重きが置かれることを見過ごしてはならないだろう。

英語はこうした音による抑揚とリズムの結合でさまざまなコミュニケーションの表情が現れる。各音節に母音が絡み，平坦気味の抑揚を特徴とする日本語とかなり違う。俳句や短歌のリズムと英詩の韻律を比べるとその違いがすぐわかる。また，わらべうたにしても同じようなことが言える。*Mother Goose's Nursery Rhymes* に見られる脚韻（rhyme）を踏みながら連続的な構文で積み上げていく “This is the house that Jack built” という積み上げ唄（accumulative rhyme）がその一例だ。

This is the malt
That lay in the house that Jack built.

The is the rat,
That ate the malt
That lay in the house that Jack built.

This is a cat,
That killed the rat,
That ate the malt
That lay in the house that Jack built.

…

その昔，友人から贈られた “This is the house that Jack built” のドーナツ盤を 1 歳の娘に聞かせたところ，とたんに踊りだしたことがある。この小気味よい抑揚とリズムが，マザー・グースの特徴であり，「ずいずいずっころばし」のような日本人の心の中で息づくわらべうたのリズムと比べると，どこか異質の感がする。

主語発見と名詞の素顔

日本語ではしばしば主語，時には目的語を省略したりする。テレビのスーパーでは話し手の省略された言葉を括弧で補っているのをよく見かける。適当な省略があっても文が成り立つのは不思議だ。英語では，E メールは別として，主語を省略することはまずできない。仮主語・真主語という文法的な事柄が文の脈絡に作用してそれなりの雰囲気を醸し出すこともあれば，どっしりと構えた長い主部もある。

ところで，英語では日本語と同じように何でも主語にすることができる。ちなみに，“and” を

主語にして文をつくってみてはどうか。“And” is a conjunction. それでは “of” はどうか。“Of” is at the top of the page. さらに “through” だったら，“Through” has seven letters. という風に何でも主語になる。いずれにしても英語において主語は次にくる動詞と連携して大事なのであり，主語を見定めることが理解の鍵となる。日本語では（述語）動詞が終わりにくることが多く，いつの間にどこかで飛んでいってしまったり，ついてこなかったり，迷走したりする。テレビでプロ野球の解説者が，「私は，点を取られましたが……よかったです」。これは「私は……よかったと思います」ということだった。通常，英語ではまず「主語」そしてその後「動詞」となり，混迷は見られない。日本語では動詞が最後にくることが多く，さらに主語の省略もありうるのだが，それほど問題にならないし，聞き手が推量したりして無意識にそれを補っている場合が多い。英語においては主役である主語をはっきりと示し，聞き手はそれを瞬時にとらえなければコミュニケーションは成り立たない。

ところで，英語を理解し，使用するにあたって心得ておかねばならないことがある。主語を成り立たせる名詞の素顔をしっかりと捉えておくことが肝腎である。一見簡単に見えても，侮ってはいけない。

次の(A)と(B)のどちらが正しい文か。

(A) There is **book** on the table.
(B) There is **a book** on the table.

答えは(B)である。「簡単じゃないか」と言う前に，“book” と “a book” の違いを考えてみよう。まず目を閉じて「本」を頭に浮かべてみる。それから実際それに触ってみる。いや，触れない。それは頭に描いた mental picture だから触ることはできないのである。それでは，ここで目を開ける。前にある「本」を触ってみよう。自らの手で実際に触ることができる。これが “a book” なのだ。これでわかるように，“a” の役割は普通名詞を具体化することであり，そのおかげで「本」を見ることができるし，その気になればかじることもなめることもできる。

日本人はしばしばこの “a” を落とすが，別におかしいと思わない。むしろ，平気だ。入試で自由英作文（150 語）の採点をしていると，“a” を落としているのが一番多い。これは日本語のチャンネルの切り替えができていないためだろうか。「車の運転できますか？」はさしずめ “Do **you** drive **a car**?” となろう。日本語と数の感覚は実に微妙だが，最大限に縮める俳句におよそ数は出てこない。これが英語の表現に影響してくるのだろうか。

そこで，芭蕉の俳句を二句取り上げてみる。

古池や蛙飛びこむ水の音
閑かさや岩にしみ入る蝉の声

蛙は何匹か？　蝉は何匹か？　これは読み手の鑑賞にゆだねられている。だが，英語に訳すとなるとどうしても数を表現しなくてはならない。いずれも mental picture ではないからだ。「閑かさや……」を英語に訳してみる。“**Shi**zuka**sa**ya iwani **shi**miiru **s**emino koe” の /shi/ や /sa/ /se/ の音を意識し，英語にも /s/ の音を入れたいということもあり，蝉を一匹にする。

Silen**ce**?
The voi**ce** of a **ci**cada
Seeps into rock**s**.

上の句とは逆に，気になるのが安西冬衛の「春」と題した一行詩だ。「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った」。この「一匹」は重要な語であり，この詩の核ともなっていることに注目したい。

さて，日本語は傾向として数に無頓着であるが，数えるとなるとその多様な数え方には目を見張る。中世アイルランドの物語『ダ・デルガの館の破壊』（*Togail Bruidne Da Derga*）を最近日本語に訳したが，古アイルランド語も英語と同じようにただ数字だけで済むのに，日本語訳はそうはいかない。ちなみにある箇所をここに記してみる。

「その方のお名前は？」とマッケーフトが王に尋ねた。

「ラインのダ・デルガ。彼は贈り物を所望してわが館に来たことがある。彼を空手で帰しはしなかった。わしがダ・デルガに与えたのは，100 頭の牛，100 頭の太った豚，体に合う 100 着の外套，100 点の光る武器，10 個の金色のブローチ，10 本の桶，茶の毛色をした 10 頭の馬，10 人の召使い，10 基のひき臼，首に銀の鎖をつけた 27 頭の白い猟犬，そして野鹿の群よりも速く走る 100 頭の駿馬である」[5]。

言語のもつひとつの特徴があぶりだされているだろう。ここでもうひとつの落とし穴がある。上記の “silence” であるが “a” は付いていない。いわゆる抽象名詞だからである。それでは抽象とはなにか。抽象とはものの本質を抽出することであり，これによって生まれたのが抽象名詞ということになる。だから，抽象名詞は見ることはできないし，触ることもできない，食べることもできない，よって数えることができない一群の名詞を指す —— beauty, hatred, peace, hardness, simplicity, love, etc.

ここで例外はあるにしても，ひとつの作法を身につければ英語独特の声の通路に簡単にチャンネルを合わすことができるだろう。それは読み書きの中で抽象名詞の前に “the” が付いたら，後にはかならず “of” がくるという約束事である。ちなみに，上記の語の前に “the” を付けると “ **The** beauty **of the** hatred **of the** peace **of the** hardness **of the** simplicity **of the** love **of** the woman is great.” となろうか。めちゃくちゃで何を言っているのかわからないが，約束に従えばこうなる。

また，一見複雑に見える次の文の構造はどうなっているいのか。

> Like Synge, Hearn spent his boyhood and his youth in Dublin and like Synge he found in **the folklore**, **the** haunting **beauty**, **the intimacy** and **the** special **fortitude of** island communities a welcome escape from the pressures of modernism and change.[6]

作法に従えば，語句のつながりは一目瞭然だ。“…he found a welcome escape from…” という文の仕組みがすぐにわかるであろう。こうしたストラクチャーによって英語のチャンネルは増幅する。

文化の地平

文化は言語，個人と社会の関係，宗教は哲学および価値観，生活様式，社会構成，歴史，行政組織，芸術や文学作品など，多くの要素からなりたっている。それは国や民族的集団によって多様であり，木の根のように絡まって，一つを引っ張ると他が動き，一つを変えると他も変わらなければならないといったように，相互に関係している。それゆえ，異文化コミュニケーションとしての英語には言語メッセージだけではなく，身振りや手振りといった身体各部の動作，人と人との距離や空間の使い方，それにパラ言語といった非言語メッセージが一緒になって声の通路に奔流する。

古来，日本人は木の文化をはぐくんできたといわれている。「木の文化と石の文化」という図式で日本と西洋の文化をみる場合，建築とか習俗はかなり鮮明に両文化の本質を浮き彫りにしてくれるであろうが，他の多くの分野もその射程に入ってくるのでいきおい複雑になってくる。木の文化の深層を多少なりともさぐりあてるには，古代からの視点もまた欠くことのできないものであるが，遥か古の原始的観念は日本人の心の奥にいまだにとどまっているのではないかと思われる。

岩石砂漠に生まれたキリスト教はヨーロッパの森林を開墾し，森の原始の神々を追い払い，その対決的なきびしい乾燥した思想は隅々まで伝播したようだ[7]。そして地平線が出現したのである。一方，日本は依然として国土の三分の二が森林におおわれている。狭く，起伏に富んだ地形をおもい浮かべれば，地平線がわれわれの眼前に現れることはない。地平線の有無は両文化の決定的な相

違を生みだしたといってよい。

ところで，われわれは「地平線」あるいは「水平線」といって両者をはっきり区別するが，英語では horizon（仏 horizon, 独 Horizont）の 1 語で両方を示す。「境界」あるいは「周囲をかこんで境界づけているもの」を意味している。そこで，“horizon” を日本語にするときは地平線か，それとも水平線か見定めなければならず厄介である。ちょうど brother（兄か弟）や sister（姉か妹）のように。

地の底から湧き出る表現の違いは文化を単純に表象しているのではないだろうか。木の文化と石の文化をそれぞれほのめかす面白い表現がある。「草の根を分けてもさがす」これはあらゆる方法で，どこまでもさがすことを意味し，『御伽草子』の「花世の姫」からきていると言われる。「草の根を分けても犯人を捜し出す。」というふうによく使われる表現だが，似たような意味で使われる英語は，“We'll *leave no stone unturned* in our efforts to find the culprit.” この語句 “leave no stone unturned”（石を余すことなくひっくり返して）はまさに石の文化を示唆する表現である。

文化的背景を促す文句が新聞の見出しに pun（同音異義による地口，語呂合わせ）や parody（もじり）の形でしばしば使われる。スポーツ記事の見出しに多い。“Gone With The Wins” これはアメリカン・フットボールのアトランタ・ファルコンズに関しての記事だが，*Gone With the Wind* の洒落であることはすぐ気づくであろう。

また，プロバスケットボールのシカゴ・ブルズのデリック・ローズが左足を抱えて床に倒れた写真と一緒に “On wounded knee” という大きな見出しが添えられている。これはおよそ 40 年前にベストセラーとなり，17 カ国語に翻訳された名著，Dee Brown の *Bury My Heart at Wounded Knee*（邦訳『わが魂を聖地に埋めよ』1972）のもじりである。アメリカ政府は 1890 年 12 月 29 日，サウスダコタ州のウンデッド・ニーでスー族を虐殺。これによって白人とインディアン（北米先住民）の戦いに終止符が打たれた。部族の酋長たちや勇士の胸を打つ言葉は圧巻である。シリコンバレーで名を馳せた Tom McNichol が *The Washington Post* 紙のコラムに “Bury My Heart @ Burstbubble.com” を書いた。“Hear me, I am Chief Seattle, Leader of the once-great Dot-Com people.” ではじまり，最後のパラグラフには “And when the last of the great Dot-Com people shall have perished, and the memory of my tribe shall have become a myth among economists … these shores will swarm with the invisible dead. Our dead will never forget this beautiful world that gave them being.” とあり，*Bury My Heart at Wounded Knee* の酋長の口調と重なってくる。

人気の高いイギリスのウィリアム王子が結婚するとき，“The son also rises: Should William be king?” という見出しが現れた。これはもちろんアーネスト・ヘミングウェイの小説 *The Sun Also Rises*（『日はまた昇る』）の語呂合わせである。ヘミングウェイの作品は映画化されたものが多く，それだけポピュラーでこういった洒落に使われる。

The Times（August 12, 2012）はオリンピックの勝利に涙する選手たちの写真を載せ，“The crying Games” という見出しで大々的に報じている。自分を抑え，平静を装うという英国人の伝統的な慎み深さはどこへいってしまったのだろうと問うている。*The Crying Game* はニール・ジョーダン監督のサスペンスで，1992 年製作のイギリス映画で多数の映画賞を受賞している。見出しはこれに The Olympic Games をかけている。

こうしてイギリスやアメリカ，アイルランドの新聞・雑誌の記事の見出しにしばしば登場する語呂合わせはひとつとっただけでも，文化を一瞬に巻き込むほどの情報を有している。英語学習において文化のさまざまな感覚を紡いでいくことにより声の通路が豊かになるとおもわれる。

《注》

（1） Bram Stoker, *Dracula*（Oxford: Oxford University Press, 1996), 5–6.

（2） ブラム・ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』平井

呈一訳（創元推理文庫，1999），14–15 頁。

（3） C. T. Onions, ed., *The Oxford Dictionary of English Etymology*（Oxford : Oxford University Press, 1966）

（4） 科学雑誌『ニュートン』（2012 年 9 月号）の表紙には「ヒッグス粒子とは何か？」とある。Higgs は人名だが，「ヒッグズ」とすると違和感があるのだろうか。

（5） 小菅奎申・松村賢一・三好みゆき・大澤正佳・北文美子・木村正俊・真鍋晶子・盛節子訳『ケルティック・テクストを巡る』中央大学人文科学研究所翻訳叢書 8（中央大学出版部，2013），12 頁。

（6） 松村賢一編注『The Rattle Bag : Readings in English Cultures　英語文化を読む』（研究社，1994），48 頁

（7） 聖書に関しては『大学生の英語学習ハンドブック』（研究社出版，1999）所収の拙稿「文化研究と異文化理解」を参照されたい。